



デンマークの野外博物館 Open-air Museums in Denmark

丸山 泰明 (COE研究員・PD)
MARUYAMA Yasuaki

2005年の12月、一週間ほどの短い期間だったが、デンマークとスウェーデンを旅してきた。今回はデンマークで訪れた民俗についての二つの野外博物館、フリーランドムセー(Frilandsmuseet)とフューネン村(Den Fynske Landsby)について紹介することにした。

フリーランドムセーにて

デンマークはユトランド半島と大小の島々からなる北海道の半分ほどの広さの国土に、北海道と同じぐらいの国民が住んでいる国である。その首都コペンハーゲンの中心部から電車で30分ほどの郊外にフリーランドムセーはある。86エーカーもある敷地には1650年から1950年ぐらいまでの約50軒ほどの民家が各地方から移築され、多くの民家は内部の生活道具なども再現されている。家だけではなく、周囲の景観も再現され、実際に昔の服装をした人々が農作業をしたりして働き、来館者たちに解説し、質問にも答えてくれる。牛や羊などの家畜も飼われている「生きている博物館」である。ベルナルド・オルセン(1836~1922年)が1897年に小規模の野外博物館を設立し、1901年に現在の農科大学の跡地へと移転、1920年に国立の施設となった。設立の背景には、国民国家の時代におけるナショナリズムの高揚がある。1864年、デンマークは第二次シュレスヴィヒ戦争でドイツにシュレスヴィヒ地方を奪われた(第一次世界大戦後、ドイツから北部シュレスヴィヒを再び割譲)国土を大きく失ったデンマークは外で失ったものを内で取り返すために国内の開拓・産業振興を進めていくが、フリーランドムセーもこのような時代の影響を強く受けている。愛国心が強く、第二次シュレスヴィヒ戦争にデンマーク軍の士官として従軍もしていたオルセンは、フリーランドムセーに現在はドイツ領になっているシュレスヴィヒ地方の民家を移築し、また17世紀にスウェーデンとの戦争で失った南部スウェーデンのスコーネ地方の民家も移築している。都市化や工業化により消えていく過去の生活を国民や民族の「伝統」を示すものとして見出し、収集・保存・

展示・研究する機関として設立されたのが民俗博物館なのだが、フリーランドムセーは現実の国境線の範囲を越えて、「本来の/あるべきデンマーク」を展示しているのである。

ビジターセンターで英語のガイドブックを買い、中に入る。訪ねたのが冬の12月だったので、畑仕事はしていなかった。家畜もいない。冬の間は限定的に開館するだけなので、家畜はどこか別の場所で飼われているのかもしれない。いくつかの家の屋内には昔の衣装を着た解説をしてくれるスタッフがあり、クリスマスの飾り付けがなされていた。東ユトランド地方から移築した領主の農場の屋敷内では、昔の衣装をした女性がお菓子作りの実演をしており、また小さな女の子がお父さんと一緒にお菓子作りを体験していた。風車の横の広場にはテントが建てられ、外ではクリスマスツリーのモミの木を、中ではクリスマスの飾りやパン・チーズ・ワインなどを売っている。私もツリーに下げるサンタと魚の飾りとフェルト製の犬の指人形をお土産に買い、すっかり楽しんで博物館を後にした。

フューネン村にて

コペンハーゲンから特急のインターシティ・リユンで1時間あまり離れたオーデンセ市は、フン島の政治的・商業的な中心地であり、人口18万人ほどの都市である。アンデルセンが生まれた街でもあり、アンデルセンを記念した公園や博物館もある。このオーデンセ市の中心部からバスで10分ほど離れた郊外にある野外博物館がフューネン村である。フューネン村には19世紀のビジターセンターで購入したガイドブックはアンデルセンが生きた時代と説明している。民家や学校・風車などあわせて26軒が移築されている。ここは通年開館のためか、羊や鶏などが実際に飼われていた。馬もあり、子供が乗って楽しんでた。入り口にモミの枝を打ちつけた農家に入ると、中ではレバーペーストやハムをのせたパンが食べられるようになっている。隣の司祭の家では、昔の衣装

を着たおばちゃんに自家製のビールを振舞ってもらった。日本で市販されているビールよりも炭酸が少なく、コクのある味わい深いビールだった。さらにおばちゃんに勧められるままに、暖めた 要するにお燗をした ビールを試したり、さらにその中にパンのかけらを入れて飲んだりする。ビールで体が温まったが、何よりもおばちゃんのアットホームな対応に心が温まる。その隣の農家に入ると、中庭一杯に甘い香りがただよっていた。ここではリンゴをつぶして絞ったジュースを振舞っていた。またお菓子も試食できるようになっていた。真っ黒なケーキがあったので聞いてみると豚の血でつくったケーキだという。もちろん食べてみたが、血の味はさほどせず、普通の美味しいケーキだった。このような伝統的な料理を試食できる他にも、来館者が藁でクリスマスの飾りのヤギを作ったり、クリスマスツリーの飾りを作ったりすることができる家もあった。今回の旅行で訪れた博物館の中で、もっともくつろぎ楽しむことができた博物館だった。

おわりに

近年のヨーロッパの民俗学界では民俗博物館が国家や

地域の文化的アイデンティティを表象するための装置であることが批判的に問い直され、新たな姿へと変わろうとする動きが起きている。イギリスのウェールズ民俗博物館 (Welsh Folk Museum) のように、前近代の生活である民俗に限らず、広く近代の生活も含める博物館として1995年にウェールズ生活博物館 (Museum of Welsh Life) へと名を変え、さらには今年になってケルト時代からの通史的展示を行うセントファガンズ歴史博物館 (St. Fagans National History Museum) へ変わったように、名称と内実が大きく変化した例もあるが、今回訪れた二つの野外博物館は、まだ近代の生活を扱うようにはなっていない。

もっともこのような博物館学的な関心以上に、今回実際に訪れることによって強く実感することができたのは、来館者たちの生活や人生の一部となっている博物館だったことである。家族連れ、特に小学校入学前の小さな子供を連れた来館者が多く、親と子が、あるいは祖父母と孫がクリスマスに訪れて楽しみながら学ぶ。伝統的な生活が生きているだけでなく、人々の生活の中にも生きている博物館の姿が印象深かった。



写真1

フリーランドムセー 移築された民家で「村」が形成されている



写真2

フリーランドムセー お父さんと一緒にお菓子づくり



写真3

フューネン村 民家の柵の中では羊が飼われている



写真4

フューネン村 みんな熱心に藁細工をつくっていた